

## 3.11以降の現代社会理論に向けて(2)

『“境界領域”のフィールドワーク』の再検討とA.メルッチの  
「多重/多層/多面の自己」の一考察

鈴木鉄忠

### **Toward Contemporary Social Theories after 3/11(2) A Review of “Fieldwork on the Liminal Territories” and Consideration of Alberto Melucci’s Idea of the Multiple Self**

Tetsutada SUZUKI

The aftermath of the 3/11 confronted us with the tension between the possibility and the limit of a “planetary society” (Melucci 1996), a society completely interconnected within itself, but still dependent on the planet Earth and the human body. In this study, we review the results of our previous research called “Fieldwork on the liminal territories” (Niihara edit. 2014) and investigate the conceptual links between liminal territories and the planetary society. Furthermore, we examine Melucci’s discussion of identity, which is considered as the capacity to respond to/for an ongoing process of the multiple self rather than a static thing or an essence in modern notion. We suggest that the multiplication and contradictoriness of the self may be key elements to an image of a person in the planetary society.

#### 1. 問題設定 惑星社会の“連なる動き”をとらえるための人間像

本稿では、共同研究チームの課題「3.11以降の“惑星社会の諸問題”」を進めていく上での認識論/方法論を錬成していくことを目的としている。

この課題の一端に応えるために、前拙稿<sup>1)</sup>ではA.メルッチ (Alberto Melucci) が「惑星社会論」を提示する理論的な道筋をたどっていった。とりわけ「複合社会論」から「惑星社会論」へのエラボレーションのなかで、どのような論点が新たに付け加えられたのかに着目した。「中期」で主に論じられた「複合社会論」では、分析の主眼は社会的行為の可能性の拡大とそれがもたらすジレンマの解明に置かれていた。それが「後期」「晩期」では、社会と人間の「限界性」という論点が前景化していることを指摘した。社会の存続そのものを掘り崩すほどまでに行為

の可能性が拡大したいま、可能性と限界の緊張をいかにとらえるかが焦眉の問題になった。こうした同時代認識が「惑星社会論」を特徴づけていた。

本稿で取り組む課題は2つある。第1に、共同研究の成果『“境界領域”のフィールドワーク』<sup>2)</sup>で残された課題をふりかえることである。これは共同研究チームの課題「3.11以降の“惑星社会の諸問題”」の前進にあたる。なぜふりかえるかといえば、ここでも社会と人間の「限界性」の重要性が指摘されているが、その論点を社会理論のなかに組み込んでいないことがチーム共通の課題として浮き彫りになったからである。本稿の2では、惑星社会の“連なる動き”をとらえるための認識論／方法論をどうつくるかという課題を検討する。

第2の課題は、メルッチのアイデンティティ論の検討である。それを通じて、惑星社会に生きる人間の内面の変動とその創造的変化の過程を理論的に跡づけることである。そのために本稿の3では、『ブレイング・セルフ』<sup>3)</sup>の第3章「多重／多層／多面の自己のメタモルフォーゼ」に着目する。なぜならこの章が意味する通り、個々人の内面という分子的レベルの「多重／多層／多面の自己」が外界との相互作用や他者とのかかわりをつうじて「メタモルフォーゼ」する側面が中心に論じられるからである。理論的には、「境界領域」の第2位相である「心身／身心現象の境界領域」の動態と可能態から第3位相を覗き込む、あるいは惑星社会論における「内なる惑星」としての身体に焦点を据えて、「未発の状態／未発の社会運動」のおおよその方向性を指し示すことを試みる。

## 2. 『“境界領域”のフィールドワーク』のリフレクション

### 1) 『“境界領域”のフィールドワーク』のリフレクション

「3.11」が突き付けた私たちの生きる社会の末路。直線的に進むと思われた社会変化の矢先に待つのは、「惑星社会」に生きとして生きるものすべてを巻き込んだ破局か、それともかろうじて生き延びるのか。『“境界領域”のフィールドワーク』で強調されたのは、こうした事態が何も「3.11以降」に始まったのではなく、これまでのひとつひとつの選択により準備されたことであった<sup>4)</sup>。しかしながらそうした「未発の状態」を細分化した個別科学でとらえるのはあまりにも難しい。知覚したとしてもそれをとらえるための枠組みが十分でないために目をそむけてしまう。あるいは認識主体の側が、そうした知覚すら持てないでいる。それでもなお、小さな事実や言動のなかにある社会変化の萌芽に視点を合わせ、そこから全体をとらえ返すためには、いかなる認識論／方法論が必要か。その手がかりとして設定されたキーワードが“境界領域”だった。

“境界領域 cum finis”<sup>5)</sup>は、境界区分上の分離・分割だけでなく、そこでの“連なる動き”の動態と可能態をも表現しようとしている。個々人の内面で起こる分子的レベルの「動き」、すなわち目には見えないほどの社会的行為の最小単位である「毛細管現象／胎動／個々人の内なる

社会変動 / 未発の社会運動」, そこからミクロ・レベルの対面的状況での二者関係の“連なる動き”へどう変化していくか, さらに三者関係以上へどう広がっていくか. こうした動態と可能態にいかにかアプローチするかが課題として設定された<sup>6)</sup>. そして『“境界領域”のフィールドワーク』の第1部では, “連なる動き”の動態と可能態をとらえる認識論 / 方法論として, 既存の境界区分の「端」「果て」「間」に身を置き, そこから全体把握へ向かうという現実の見方が提起された<sup>7)</sup>. さらに第2部では, こうした社会変化へとつながりうる個々人の内面での“連なる動き”の動態と可能態をとらえる試みが, 具体的な場所や現場でのフィールドワークを通して考察された. フランス, 北アドリア海圏国境, ニューヨークのハーレム, 新宿大久保, ヨーロッパ「周辺」の島々をフィールドとして, そこで出会った / 出遭った「景観」を描出し, 何度も想起しながらその背後にある意味を解釈していく方法が採られた.

こうした試みを受けて, 『“境界領域”のフィールドワーク』の終章で古城利明は, “境界領域”論の課題を以下のように指摘した.

しかしながら, 本書では全体として, こうした問題設定は後景化している. それは何故か. それは単なる諸科学の分担の問題ではない. むしろ“境界領域”論がこの「物理的な限界」を取りこむ「エピステモロジー / メソドロロジー」を十分に練り上げていないからではないか, あるいは先送りしているからではないか. だが, 既に触れた「3.11以降」の状況を踏まえれば, この問題をいつまでも先送りするわけにはいかない. さしあたりそれは, 新原のいうように, 「生存のあり方」を問うなかで, また「人間の境界線」の揺らぎを問うなかで自覚的に取り上げられるべきであろう. だがその「エピステモロジー / メソドロロジー」とは何か. ここに残された課題があるように思う. 「惑星社会」から「惑星」を展望に入れた「エピステモロジー / メソドロロジー」, それは宇宙論を前提とした身心論なのか, 空無を覗き込んだ現象学なのか, 課題は深い<sup>8)</sup>.

ここには広遠かつ微細な動きを含めた惑星社会 身心論を彫琢するためには, 「物理的な限界」を自覚的に取りこんだかたちで, 惑星社会の諸問題へ向かう「エピステモロジー / メソドロロジー」を練り上げる課題が提起されている. この「物理的な限界」とは, A.メルッチの「惑星社会」論を念頭に述べられている. 1つは「惑星社会」の物理的な限界としての「惑星地球 (the planet Earth)」であり, もう1つは「内なる惑星 (the inner planet)」としての「身体」である. よって「物理的限界を射程に含めたエピステモロジー / メソドロロジーの錬成」とは「惑星地球」および「身体」を正面に取り込んだ惑星社会論の認識論 / 方法論上の錬成ということになる.

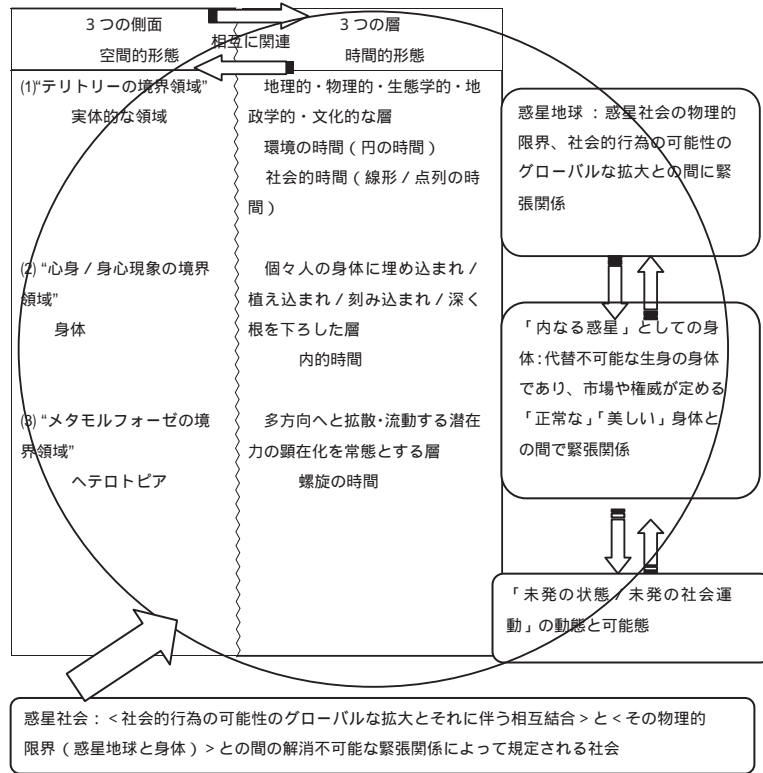
この課題に対して新原道信は応答を試みる. まず『“境界領域”のフィールドワーク』の到達

点を『3.11以降』の『“惑星社会”と人間の「物理的な限界」から始める』ことだと確認する。そしてどこから「始める」のかという問いに、「私たちの限界」を「受け容れる」ことに対して「自由」となること（恐れないこと）からだと応える。こうした「物理的な限界」への認識論が「私たちの驚嘆する力」とつながること、そして「想像／創造の力」「創起する動き」が出てくると考察を深める方向性を示した<sup>9)</sup>。

さらに『“境界領域”のフィールドワーク』から引き継ぐべき論点として、すでに「“惑星社会”の諸問題の切片・断片に出会ってみたい」のではないかという視点を提起する。それゆえ「3.11以降の“惑星社会の諸問題”でまったく新しいフィールドや対象に向かうのではなく、各調査者が長い時間をかけてかかわってきた場所や人との相互作用の意味をあらためて考察することの重要性を説く。1つの場所、1人の人間に長期的にかかわって調査研究することの意味を考えることは、メルッチの指摘した「創造力」をめぐる調査研究のジレンマ——創造力というテーマに関してシステム化された研究がそもそも可能なのか、高度に主体的な活動である創造の要素を個別具体的な行為のなかから析出してそのプロセスを客観化するのには困難なのではないか、調査者たちは新たな知を生産しているのか——をどう可視化させ、減らし、「開かれた理論」を創っていけるのか、という問いとも重なることを示唆している<sup>10)</sup>。

筆者の北アドリア海圏国境の拙稿をふりかえると、「物理的な限界」への「問題意識」が後景化しているといわざるを得ない。「国境の越え方——イタリア・スロヴェニア・クロアチア間国境地域「北アドリア海」を事例に<sup>11)</sup>」と題した章では、国家（state）と国民（nation）の境界区分が揺らぐ「現場」を“テリトリーの境界領域”として設定した。歴史的に言語・文化の多層性を特徴として地域が形成された北アドリア海圏は、20世紀の「国民国家の絶頂期」に幾度も国境線引きが行われた。しかしながら前世紀末の東西冷戦構造の解体とヨーロッパ統合・拡大により、国民国家の相対化が進んだ。そうした背景を踏まえ、国境を越えた地域形成と多文化・多言語の共存・共成を実現するキーファクターとして、前近代に形成されてきた「歴史的地域」に着目した。かつて生活の場だった地域社会からの「根こそぎ」を体験した人々による「根付き直し」の集合的な取り組みが行われるなかで、いかにして「歴史的地域」が再創造されていく（あるいは妨げられる）かをフィールドワークから素描した。そこでは複数の「歴史的地域」の組み合わせを国民の境界で区切られた単位に回収してしまう危険性と、「歴史的地域」の「小さな文化」に着目した地域を再創造させる萌芽的な取り組みがあることを指摘した。しかしながら、“境界領域”の第1位相（“テリトリーの境界領域”）と第2位相（“心身／身心現象の境界領域”）の連関は素朴な記述の段階でとどまったままだった。そして第2位相から第3位相（“メタモルフォーゼ”の境界領域）と関連する“連なる動き”には迫ることはできなかった。さらに古城が指摘するような「物理的な限界」を自覚的にとりこんだかたちで“境界領域”の各位相をとらえようとする自覚がきわめて希薄だった。

図 1 “境界領域”と「惑星社会」の関連概念図



出所：新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク』（中央大学出版部，2014年，39ページ）を参  
考にし，鈴木鉄忠「“境界領域”としてのヨーロッパ試論」『中央大学社会科学所年報』（中  
央大学社会科学研究所，第17号，2012年，140ページの表 2）に加筆修正した。

## 2) 惑星社会のフィールドワークに向けての暫定的な理論枠組み

以上のリフレクションから『“境界領域”のフィールドワーク』から引き継ぐ課題を再整理すれば，暫定的な素描ではあるが，次のようになろう（図 1）．“境界領域”の第 1 位相である“テリトリーの境界領域”には，惑星地球を構成する地理的・物理的・生態学的・地政学的・文化的な層が射程に含まれる．惑星地球は，惑星社会の物理的限界であり，社会的行為の可能性のグローバルな拡大との間で，たえず緊張関係を有している．そのなかで地域社会は，惑星地球の「縮図」として位置づけることができよう．地域社会は地表の上で成立し，物理的な空間を有する生態系の一部であり，国家や地方行政といった地政学的な単位に組み込まれており，伝統や歴史を通じて行為に意味が付与される文化層を蓄積している．

第 2 位相の“心身 / 身心現象の境界領域”は，「内なる惑星」としての身体と関連する．“テリトリーの境界領域”で展開する集合的なプロセスは，「個々人の身体に埋め込まれ / 植え込まれ / 刻み込まれ / 深く根を下ろした層」を形成する一方で，それに完全には置き換えられない私

たちの存在そのものである生身の身体があり続ける。ただ同時に身体は、市場や権威が定める「正常な」「美しい」身体との間で常に緊張関係にある。

第3位相の“メタモルフォーゼの境界領域”は、惑星社会に生きる人々の“連なる動き”にかかわる。この位相を実証的にとらえること自体の困難が存在するのだが<sup>12)</sup>、理論的には「未発の状態／未発の社会運動」の動態と可能態として設定しうるだろう。

惑星社会はこうした“境界領域”の全位相を含んだ動態と可能態である。その動態と可能態は少なくとも3つの区別されうるレベルが存在する。まず各位相の境界区分間で生じる動態と可能態がある。そして位相間で起こる動態と可能態も考えられる。さらに可能性と限界との間の解消不可能な緊張によって引き起こされる動態と可能態もありうる。

こうした動態と可能態をもつ惑星社会に生きる人間像とはいかなるものか。それをどのようにして社会理論に組み込めばよいのか。それが次章の課題となる。

### 3. 「揺れ動く自己」の多重／多層／多面性 惑星社会に生きる人間像

#### 1) 「ゆるく固定されたピボット・ピンのように揺れ動く自己」

“境界領域”の第2位相から第3位相の動態と可能態をとらえるために、ここではメルッチのアイデンティティ論に着目したい。なぜならメルッチは惑星社会に生きる人間の等身大の姿を把握する認識論／方法論を展開したと考えられるからである。常に特定の状況に拘束された生身の人間、限られた時間を生きる人間、取り換え不可能な身体を持つ人間を社会理論に組みこもうとした。その理論的な到達点が、「ゆるく固定されたピボット・ピンのように揺れ動く自己」<sup>13)</sup>、すなわち「プレイング・セルフ (the playing self)」であった<sup>14)</sup>。

自己を形成する諸次元 つまり、時間や空間、健康や病気、性や年齢、生や死、生殖／再生産や愛 は、もはや所与のものではなく、私たちが取り組むことが可能な1つの問題となった。もはや自己は、安定したアイデンティティのなかにしっかりと固定されているものではありえない。揺れ動き、よろめき、そしてこなごなに砕けるかもしれない。「遊び (play)」とは、ゆるく固定されたピボット・ピンの動きをあらゆる機械工学用語であるが、ある固定されたポイントから、あるいはその周辺での自由自在な動きをも意味する。自己もまた、この動きのなかで揺らぎ、震えおののき、我を失うかもしれない。しかし、この揺れ動きの渦中で、自らにこの「遊び」をもたらすことを身体で覚えていくかもしれない<sup>15)</sup>。

「自己を形成する諸次元」が「もはや所与」ではなく「問題」となったということは、これまで社会を成り立たせていたあらゆる境界区分が揺らいでいることに他ならない。こうした社



会に生きる私たちの「揺れ動く自己」は、一貫した自己をもつ近代的自我でもなければ、不確実性に变幻自在に対応できる可変的アイデンティティでもない。欲求する自己、損なわれた自己、関係性の中にある自己、合理的に推論し選択する自己、自らをふりかえる自己などが、1人の人間のなかで絶えず混在し、刻一刻と変化している。

メルッチによれば、こうした多重/多面/多層の自己を特定の状況のなかで束ねていく能力がアイデンティティである。そしてその動態は「アイデンティゼーション (identization)」という造語で表現される<sup>16)</sup>。さらにこうしたプロセスを社会のなかに位置づけた場合、まさしく惑星社会に生きるひとりひとりが社会をつくる担い手となることを可能にしてゆくような「個体化(個性化) (individuation)」が同時に進行している<sup>17)</sup>。アイデンティティ (identity) がアイデンティゼーション (identization) へ、個性性〔個性〕(individuality) が個体化〔個性化〕(individuation) へというように、性質や状態を表す接尾辞が動態や過程を意味する接尾辞に変わっている。これは単なる用語法の変更にとどまらない。「心身/身心現象の境界領域」の動態と可能態に迫るような認識論/方法論への転換に注意を促している。

## 2) 多重/多層/多面的な自己のズレやブレ

変化のリズムは猛烈なペースで加速している。私たちの社会的な属性は、多重/多層/多面化し、様々な可能性やメッセージが私たちの体験のフィールドに流れ込んでくる。伝統的に個人のアイデンティティを供給してきた準拠枠(家族、教会、政党、人種、階級)が弱まっている。「私はXやYである」と確信をもっているのが困難になり、「私は誰なのか?」という問いが焦眉の問題となる<sup>18)</sup>。

日常生活を送るなかで私たちは実に様々な「顔」を使い分けている。こうした自己の特徴をメルッチは「多重/多層/多面性 (multiplication)」と表現する。これには以前の拙稿で述べたように、複雑性のプロセスによってもたらされた現代社会の帰結である<sup>19)</sup>。近代化以降、社会生活が際限なく細分化していく分化/差異化のなかで、私たちはいくつもの現実および想像の社会圏域を移動し続け、そこで適切とされる振る舞いや言語に使い分けている。現代社会では、そうした分化/差異化した社会圏域自体がかつてない速さで変化する。その度ごとに適切な振る舞いや言語を再獲得しなければならない。そのために頼りにできる可能性はあまりにも多く提供されている。日常生活を送るために、溢れかえる可能性のなかから常に何かを選ばなくてはならない。こうした高度な分化/差異化、頻発する変化、可能性の超過が日常生活を覆っている。自己を成り立たせる諸次元は、関係する社会圏域の分だけ自らに折り重なり、頻発する変化の中で多層化し、常に開かれた可能性に結び付けられて多面化していく。

だが自己の多重／多層／多面性それ自体が重要なのではない。注目したいのは、「多」から「一」を選ばなければならないことにメルツァが注意を促していることである。

私たちのアイデンティティを時間の継起の中で維持し、自分は依然としてかつての自分であることを述べるのが難しいということだけではない。それと同等かそれ以上に困難なのは、ある特定の瞬間に、多くの可能な自己のうちのどの自己が自分のものかを定めるということの難しさである<sup>20)</sup>。

ここには特定の状況に埋め込まれている生身の人間が避けて通れない困難に焦点が据えられる。この難しさは、自分が置かれている「ある特定の瞬間」を、限定された時間や情報のなかで状況把握しなければならないことと関連している。そして「多くの可能な自己のうちのどの自己が自分のものかを定める」ことの難しさがある。私たちは変幻自在に「多くの可能な自己」から適切な自己を選べるわけではない。選んだとしてもそれが適切だという保証はどこにもない。あるいは選択可能な自己がありすぎて選べないかもしれない。もしくはそもそも選ぶものすらないかもしれない。しかし選択しないことも1つの選択となる。ある特定の瞬間の自己は、一貫した自我から演繹されるのでも、変幻自在になされた最善の選択でもなく、常に他にもありえた自己との緊張関係を残した困難な選択の結果なのである。

特定の状況に埋め込まれた人間の内面では、多重／多層／多面の自己の各構成要素が絶えずせめぎあい、相互作用しながら、刻一刻と変化している。こうした動きはまるで複数の自己が「交渉」しているようにみえる。

アイデンティティは、自己の異なる部分、私たち各自が属する異なる場やシステムとの間で絶えず行われる交渉のプロセスである。アイデンティティはその様々な構成要素間の交渉と見なされるが、いかなる特定の瞬間においても、私たちを構成している要素は多重／多層／多面的であり、矛盾し合う性質を持つ。アイデンティティは、その多重／多層／多面性と矛盾性に応答する力と関連している<sup>21)</sup>。

ここでは「交渉」という比喩を通じて、特定の瞬間に選ばれた「1つ」の自己は、実は他でもありえた「多重／多層／多面性」の可能態に埋め込まれている様相が表現されている。その埋め込まれ方は、ジグソーパズルのように整然とピースが収まるものではなく、矛盾をはらんだものである。この矛盾は、自己の現実態と可能態とのレベル、そして可能態内部のレベルでも起こっていると考えられよう。こうした矛盾がアイデンティティの動態を特徴づけているのである。やっかいな相手と交渉するように、アイデンティティも自己を構成する諸要素との交



渉をその都度まとめていかなければならない。

しかしこの「交渉」はうまくまとまるとは限らない。メルッチが強調するのは、それがうまくまとまることより、常に生じている内面の揺れ動きである。

私が行為するとき、私の存在は決して完全には私がしていることと合致しない。私はあるものを選択し、あるものを捨てる。自分のある部分に他の部分よりも優先権を与える。私はある部分には気づかないままである。私のアイデンティティとは、こうしたこと全てを結びつける能力である。そしてこうした様々な構成要素の間をよりよく交渉できるほど、そしてそれらとともに存在せしめることがよりよくできるほど私のアイデンティティは、自らに対してより自覚的になるであろう<sup>22)</sup>。

アイデンティティは、矛盾をはらんだ自己内交渉をどうにか取りまとめ、たえず揺れ動く自己の舵を取ることができるような、動きのなかでの応答力とでもいうべきものとなる。

ところでアイデンティティの「選択」「交渉」といった側面が強調されるのはなぜだろうか。それはアイデンティティの動態と可能態が無意識や社会秩序によってではなく、ますます個々人の意識や自覚の領野でなされる営みであることを強調するためだと考えられる。「アイデンティティが交渉されうるといっても、行為主体が外的あるいは客観的に定義されるのではなく、自らの行為の意味を産出し定義する力を備えている<sup>23)</sup>」からである。

#### 4. 結びにかえて 問いの再定位

最初の課題に戻ってまとめたい。本稿では、「3.11以降の“惑星社会の諸問題”」を進めていく上での認識論/方法論の錬成を目的とした。そのために2つの課題を設定した。第1に『“境界領域”のフィールドワーク』のリフレクションであった。前作で課題になったのは、惑星地球と人間の「物理的な限界」をどう認識論/方法論に取り込むかということだった。そこで“境界領域”の各位相に「惑星地球」「身体」「未発の状態/未発の社会運動」を関連させた仮設枠組みを設定するに至った。第2の課題として、A.メルッチの「揺れ動く自己(プレイング・セルフ)」の検討を通じて、惑星社会に生きる生身の人間像を社会理論に組み込むための検討を行った。多重/多層/多面の自己のズレやブレの動態と可能態まではふれたが、さらなる検討は課題となった。

今後の課題として、多重/多層/多面の自己のズレやブレの常態化によって生じる新たな問いを跡付けておきたい。特定の状況に拘束された生身の人間のアイデンティティは、もはや本質として解された近代的自我のように時間を超越した一貫性と統一性をもつものと想定することはできない。むしろ問題は、多重/多層/多面性と矛盾性のなかで揺れ動く自己がどのよう

に舵取りをしていけるかになる。

こうしてメルッチは新しい問いを提出する。アイデンティティが「所与」ではなく私たちの取り組むべき「問題」になるのだとしたら、次の2つの問いが再定位される<sup>24)</sup>。

第1に、「アイデンティティの境界」である。つまり「共時的には、どこで行為の主体が始まりどこで終わるのかという問題」である。言い換えれば、特定の状況に拘束された生身の個人がまさにそのときに、自分を位置づける範囲の境界をどう設定するかという問題になる。

第2に、「アイデンティティの連続性」、これは「通時的には、この主体が時間を通じてどうやって持続していくかという問題」である。変化のなかで揺れ動き、限られた時間のなかに置かれた生身の人間が、何をよりどころにして連続性を獲得できるかという問題になる。

これら2つの新たな問題をどうとらえていくかに関して、メルッチは議論をさらに深めていく。「アイデンティティの境界」をめぐる問題については以下のように述べる。

アイデンティティを、自由と制約の両方を含む関係的なフィールドと考えることから始めなければならない。そうして初めて、その境界や持続性の問題を、練り直すことができる。アイデンティティの境界の問題は、制約を認識すること、それらを開くことと閉じることの相互運動と見なすことができる<sup>25)</sup>。

ここで「アイデンティティの境界」という問いに対しては、「制約の認識 (recognition of the constraints; riconoscimento dei limiti)」,そして「それらを開くことと閉じることの相互運動 (interplay between their opening and closing; gioco dell'apertura e della chiusura di questi limiti)」としてとらえる視点を提示している。

「アイデンティティの連続性」については以下のような認識の道筋を立てる。

アイデンティティの連続性は、形の連続性の問題として立て直すことができるだろう。連続か不連続かは、あたかもそれが「存在論的状态」であるかのように内容を比較することによってではなく、相関する様々なシステムが組織されていくプロセスのなかで見出されるものなのだ<sup>26)</sup>。

「アイデンティティの連続性」に対しては、「内容 (contents)」ではなく「形 (form)」の連続性としてとらえなおす見方を提示する。しかもその連続性は、「相関する様々なシステムが組織されていくプロセスのなかで (in the process-bound organization of various systems of relations; l'organizzazione processuale di diversi sistemi di relazioni)」見出されるのだという。

「アイデンティティの境界」および「連続性」に対する応答が、個々人の“心身/身心現象の

境界領域”のなかで行われている．そしてこの位相での動態と可能態が“メタモルフォーゼの境界領域”へと関連していると考えられる．これらの考察は稿を改めて論じたい．

付記：本稿は「3.11以降の惑星社会」チームの共同研究の一部である．とりわけチームメンバーの新原道信，阪口毅との研究会から多くの示唆を得ている．

#### 注

- 1) 鈴木鉄忠「3.11以降の現代社会理論に向けて A.メルッチの惑星社会論への道行きを手がかりに」『中央大学社会科学研究所年報』第18号，2014a年，127-146ページ．
- 2) 新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク “惑星社会の諸問題”に応答するために』中央大学出版会，2014a年．
- 3) A. Melucci, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996 = 新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ 惑星社会における人間と意味』ハーベスト社，2008年．
- 4) 共同研究チームの代表者である新原道信は『「3.11」以降』には，メルッチが言うところの『劇的な収支決算』の状況が持続していくという意味がこめられているととらえている．それは「突然，想定外の事件が起きたが，困難をのりこえ，『もとどおり』のありかたへと復興していく」という認識とは異なった見方である．『「3.11以前」にも“未発の状態 (stato nascente)”として存在し，実はそれが，『客観的現実のなかにすでにとっくに存在』していたのだと認識せざるを得なくなったのが，『3.11以降の状況』である」と述べる．つまり「3.11」のそれ以前と以後の「断絶」だけを見るのではなく，むしろその「連続」にも注意を払う(新原道信「序章 “境界領域”のフィールドワークから“惑星社会の諸問題”を考える」新原道信編，前掲書，2014a年，5ページ)．

「3.11以降」の地域社会をどうとらえるのかについては，地域社会学会で議論がなされている．「ポスト3.11以降の地域社会」では，「3.11」が地域社会学の存在意義の再考を迫ったこと，被災地のみを対象とした調査の蓄積を他の地域と関連させ理論化させる段階に入ったこと，露わになってきた復興・防災計画の「矛盾」は戦後日本の開発政策といかなる連続性(あるいは断絶)があるのかなどの論点が挙げられた(『地域社会学会会報』第180-186号，2013-14年)．

2014年度の第2回研究例会にて，浅野慎一は「3.11」の「断絶」に関して，国が「選択と集中」を明示的に掲げたことだと指摘する．というのも，「1.17」の阪神・淡路大震災までは，被災地の全面的な復興による果実が周辺にも及ぶというイメージがあり，開発主義の余韻が未だ残っていた．しかし「3.11」では「面的復興」は最初から放棄され，資本蓄積を目指した国益の極大化が是とされ，旧来の開発主義の終焉ないし放棄が明確となったと考える．そうした方針は2014年7月に発表された「国土のグランドデザイン2050」で明確に継承される．ここで「目指すべき国土の姿」として，リニアが通るような大都市圏，徹底した「選択と集中」がなされる地方圏域，「現代の防人」とする海洋・離島の3圏が設定された．地域の担い手は住民ではなく地域ビジネスマンとされる．「グランドデザイン」には多くの批判があるが，それを論駁するまでに至っていないというのが浅野の理解である．地域社会学からのオルタナティブとして浅野は「生活圏としての地域社会」を提起した．これを「住民の『生命 生活 (life)』の発展的再生産のための地域」と定義し，その可能性として，国家を相対化し脱領域化するような共同の創出，辺境・棄民による抵抗，主体の戦略にも言及している(浅野慎一「国土のグランドデザインと『生活圏としての地域社会』」『地域社会学会会報』第187号，2014年，2-5ページ)．

同研究会の報告で古城利明は、前著『「帝国」と自治』から課題とした3つの論点を提示し、それらを「3.11」以後の仕事と現実の動向に位置づけて考察を展開した。第1論点として挙げた「自然(環境)論をどう組み込むか」では、「未発の状態」(新原道信)と「想定外」(田中重好)を取り上げた。「未発の状態」は「3.11」以前にすでに存在していた多重/多層/多面的な諸問題が顕在化し、それが解決されて元通りになるのではなく、A.メルッチのいう「劇的な収支決算」が続き、「生体的・関係的カタストロフ」の帰結となるような状態だと説明した。「想定外」は「ハザードとして」ではなく「社会過程としての想定外」であるとした。2つの用語をヒントに第1論点の理論化の道筋を模索した(古城利明「3.11以後のリージョンとローカル 東アジア・日本を中心に」『地域社会学会会報』第187号,2014年,58ページ)。

- 5) “境界領域”は新原道信が『境界領域への旅』(大月書店,2007年)から練り上げてきた造語であり,“cumfinis”という語をあてている。“境界領域(cumfinis)”は、「いくつもの“多重/多層/多面”の『境界(finis)』が“衝突・混交・混成・重合”しつつある(cum)『場所』『時期』『瞬間』あるいは『成層』」であるとして,“テリトリーの境界領域”,“心身/身心現象の境界領域”,“メタモルフォーゼの境界領域”という三つの位相(fase)に分節化)した(新原道信編,前掲書,2014a年,iiページ)。「境界領域」概念は,“cum”“finis”の二語から成り,“finis”は「限界」「境界」「端」「果て」「終わり」の意である。“cum”は「いっしょに」という意である。よって2つないしそれ以上の様々な「境界や限界や端/果てや終わり」が「いっしょになって在る」と理解することができる。これは通常の「境界confine」が「分離・分割」の働きに終始するのに対して,「境界領域 cumfinis」は“連なる動き”の動態と可能態をも表現しようとしている。さらに,「境界」は単に平面上で「共にある」のではなく,「場所」「時期」「瞬間」あるいは「成層」も含む。
- 6) 同書,42-51ページ。
- 7) 『“境界領域”のフィールドワーク』の「エピステモロジー/メソロジー」でとらえ返そうとした1つは,近代以降の考え方の鑄型である二元論ではないだろうか。二元論の認識論を議論の俎上にのせることで,2つの固定した対立軸そのものを変化させるような動態と可能態をとらえようという試みではないだろうか。

A.メルレルの論稿では,「海/陸」に象徴される「流動/静止」の二元論が認識の遡上にのせられる。海の「果て」と陸の「果て」が混じり合う干潟を自らの生育圏とするマングローブのエピソードを通じて,メタファーではなく現に在るマングローブが,海と陸の“境界領域”の象徴的景観として,強い説得力を持つ。さらにマングローブの根をかきわけて「ナマコの眼」が「あなたを見る」というエピソードに言及することで,現実と比喻,見る側と見られる側,鶴見良行の仕事の継承を踏まえた上で,“島々のつらなり”へ議論を展開する(A.メルレル,新原道信訳「第1章 海と陸の“境界領域” 日本とサルデーニャをはじめとした島々のつらなりから世界を見る」新原道信編,前掲書,2014a年,79-92ページ)。

A.メルッチの論稿では,「観察する側(認識)/観察される側(対象)」の区別に象徴される社会科学,社会学,社会調査方法に通底する二元論的認識の問題を取り上げる。「観察する側/観察される側」双方の距離をできるかぎり保とうとするような量的調査の技法も,逆に双方の距離を縮めようとするフィールド調査も,問題を抱えている。前者はいくら対象と距離を保とうとしても,「その量的データが,どのようなかたちで収集されたのか」という問題が残る。後者はいくら双方の距離を縮めようとしても「暗黙の内に,知的認識を持つものと持たざるもの,自らの識るところのものを伝導すべき使命を持ったものと,真実と認識が運ばれてくるのを待つものとの間のヒエラルキー(位階制)が残存し続け」る。この問題を乗り越えるために,社会調査を「同じフィールド内に併存する二つの主体の関係性」ととらえることを提起する。調査者と当事者の二者関係そのものがつくられては変わりゆく動態を両者が認識するために,「契約」というキーワードを挙げる。それによ

て調査者と当事者間のコミュニケーションのなかで互いがどのような関係をつくれればよいのかという課題を明確にする。そして「遊び」というキーワード 何らかの規則はあるが、そのなかであるいは規則そのものが変わる余地を常に含むという想定 によって、メタ・コミュニケーションという見えにくい次元も認識の遡上に載せようとする(A.メルッチ, 新原道信訳「第2章 リフレクシヴな調査研究にむけて」新原道信編, 前掲書, 2014a年, 93-103ページ)。

- 8) 古城利明「再び“境界領域”のフィールドワークから“惑星社会の諸問題”へ」新原道信編, 前掲書, 2014年, 442-443ページ。
- 9) 新原道信「A.メルッチの『創造力と驚嘆する力』をめぐって 3.11以降の惑星社会の諸問題に回答するために(1)」『中央大学社会科学研究所年報』第18号, 2014b年, 53-72ページ。
- 10) 認識主体の側の限界に常に自覚的であろうとする指摘は、以下のメルッチの議論にも共通する。「本書『プレイング・セルフ』では、気付かれることもないまま通り過ぎていってしまうものを、よく見ることができるような視点を発展させたい。何の疑問も抱かないで素朴に見たとしても、見慣れたものの背後にある何かを捉えることはできない。それは、既に確立している世界観のなかでの記号を用いて、既にそのように在るとされるものを再確認し、安心することでしかないからだ。しかしそれとは別に、ものごとを見抜く(see)ことを可能にしてくれるような別のものの見方がある。当たり前だと思っていた物事を越え出て行き、最初は視界には入らずに見過ぎていたものに近づいていけるような視点である」(A.メルッチ, 前掲書, 1996=2008年, 6ページ)。
- 11) 鈴木鉄忠「国境の越え方 イタリア・スロヴェニア・クロアチア間国境地域「北アドリア海」を事例に」新原道信編, 前掲書, 2014b年, 189-232ページ。
- 12) 「未発の状態」をめぐっては、2014年度の地域社会学会の第2回研究例会から議論がなされた。先に述べたように、古城利明は「自然(環境)論をどう組み込むか」という問いのなかで「未発の状態」に言及した。質疑応答では、「『3.11』以降に顕在化した『未発の状態』とは、『物理的境界』『有限性』を取り込めていなかった社会理論、自己破壊のリスクを持つ社会システムの2点があるのでは」(筆者 鈴木), 「『1.17』の以前からあった最貧困地区の問題や『3.11』以前にそもそも原発が建設されたことの問題をさしているのでは」(浅野慎一), 「とらえるのが困難な社会過程」(古城利明)との発言があった。他方、「『未発の状態』は後追いで『ああそうだったか』とわかるような認識主体の変化をいうが、『想定外』はリスク認知の一種であり、2つの概念は認識の仕方が違うのでは」(清水亮)との指摘があった。清水の指摘から、「未発の状態」は異なった2つの側面(現象と認識)を同時に指していることが明らかになったが、これ以上議論は煮詰まらなかった。

その後「未発の状態」は地域社会学会の第3回研究例会でも議論が引き継がれた。報告した新原道信は、F.アルペローニの「発生期(stato nascente)」や鹿野政直の「未発の一揆」の議論から得た着想を練り上げたとした。そして「未発の状態」をエピソードによって説明した。1986年にサルデーニャのラ・マッダレーナ島におけるNATO原子力潜水艦基地反対の住民投票に「居合わせた」。この島の決定は、イタリア、欧州連盟、NATOの要請と圧力によって否定された。住民運動の要求のなかにある重要性をうすすらと直観していたにもかかわらず、「あの島の問題はちっぽけな問題だ。もっと重要な争点がある。地域研究者ならそれをやるべきだ」と地元の研究者たちにいわれた。このときすでにチェルノブイリ原発事故、「3.11」、その後の2011年のイタリア国民投票で原発停止の継続が決定されたことなどにつらなる惑星社会の諸問題の「未発の状態」があった。にもかかわらず、「手放して」しまったことのリフレクションと後からの気づきを述べた。

報告後の質疑応答では、「『未発の状態』は、どの状態が『未発』といえるのか。また誰がそれを発見するのか」(浅野慎一)、あるいは「『未発』は『発生』を前提している。それゆえある事態が起こった後でないと何が未発だったかはわからないのではないか。具体的に何を『発生した状態』と想定し、何を問題とするかを明らかにしなければ、『未発』ととらえられないのではないか」(清水亮)



という質疑がなされた。それに対して『『未発の状態』は、現実という連続体を認識作用で分節化することでかえって見えなくなってしまうものに目を向ける、あらためて照射するという効果がある。見えるのか／見えないのかというとらえ方ではなく、かといって「生成」「社会過程」と名付けて実体化してしまうのでもなく、現に動いているものそのものをとらえるような概念」であること、また「報告者〔新原〕としては『痛み』に関わるものが認識のフィルターにひっかかってくる。そこから『未発の状態』とリンクする。いくつものエピソードを偏ったトタリティとして描いていくことを考えている」と応答した。

上記の報告にかんする印象記で阪口毅は「新原報告が提起した『未発』概念は、方法論としては、『何が起こった後』にその道程を跡づけるしかないのだが、認識論としては、ある『出来事』を、そこに至る単線的プロセスの終着点として設定するのではなく、潜在性の位相に存在する社会過程の水脈を捉えるための認識媒体（media）として設定する、ということではないか」との理解を記している（阪口毅「地域研究の『往路』をふりかえる」『地域社会学会会報』（第188号 2015年、9ページ））。同じく印象記を残した佐藤彰彦は、チェルノブイリ原発事故以降にポーランドからサルデーニャへ移住した隣人女性との出会いのエピソードにふれて、「新原氏はその奥さんとの出会い・語りのなかに、チェルノブイリ事故後の彼女の苦悩に満ちた生活、あるいは、チェルノブイリ周辺地域の人たちが生涯、いや、自分たちの死後に及んでさえも抱き続けるであろう苦しみや後悔……が存在することを理解する」、その『『苦しみや後悔……』が彼女たちのなかに存在しているのが『未発の状態』である」と述べる。そして「3.11」後の福島の実状と重ね、「当事者たちの“Being”に対する周囲からの不理解」そして「被災自治体／被災当事者をも含め、『未発の状態』が十分に理解されていない実態」があり、『『未発の状態／未発の社会運動』が、当該地域／当事者が気づかないうちに、再び巨大なシステムの中に取りこまれながら解消され、自らの意に反して3.11以前の状態を再生産している現実」を指摘する（佐藤彰彦『『未発の状態』～システムへの解消と再生産』からの脱却に向けて『地域社会学会会報』（第188号、2015年、10 11ページ））。

13) 新原道信編、前掲書、42 47ページ。

14) 新原道信は「惑星社会の航海者」「境界領域を生きるひと」という表現で「プレイング・セルフ」の生身のあり方を表現している。「『メタモルフォーゼ』の道行き（passaggio）のなかで、実体主義か異種混交かといった対立からも身体をずらして、肩の力をふっと抜いたときに、少しだけヒジをつけて、しかも微細な変動をしているような状態で、ぶれて、はみ出しつつ、軸をずらしながら、不均衡な動きのなかで、バランスをとりつつすむのが『プレイング・セルフ』である。「流動する根」は、惑星社会の航海者にとっての『港』のイメージであり、そのような航海者は、実は嵐のなかでも、凧のときでも、港でも、それぞれの場のどこかで／どこでも、安らぎ／どよめき、静止しつつ／旅立つ。メルッチは、この“対位する身体”のアンビヴァレンスとパラドクスの豊かさを、静態的ではなく、動きのなかでとらえ表現しようとしていたのだろう。その意味でもメルッチは、「境界領域を生きるひと」であり、その動きのなかから未発の社会理論を展開しようとする生の途上に、自らの見通しの確かさを、静寂へとむかう身体の変異の道行きを通して確信／覚悟しながら、この世界を去ったことになる」（新原道信「訳者あとがき 『瓦礫』から“流動する根”」A.メルッチ、前掲書、1996=2008年、245 246ページ）。

15) 同書、4ページ。

16) 「この自己が持つ多重／多層／多面的な性質によって、私たちは、アイデンティティに関するいかなる静態的な見方も放棄し、それに代えて、同一化に関する動態的なプロセスを検討していかなければならない。〔……〕疑似形而上学が定義するような本質的な核を備えた主体を想定するよりも、私たちは、個人がそのアイデンティティを構築するプロセスに注意を向けなければならない。多重／多層／多面的な自己としてのアイデンティティは、アイデンティゼーション（*identization*）となる（同



- 書, 65-66ページ).
- 17) 「第二に, 自己の多重/多層/多面化は, 社会生活における個人の行為の位置を認識することを要求する. 現代のシステムでは, 行為の意味がつくられる場は, 個人へと移行している. したがって, 個人は言葉本来の意味で, 社会的行為者となる. 過去の社会においては, 個人の行動の意味は常に, 個人の上か下に横たわる何か, あるいは別のリアリティ 神, 自然, 親族システム, 国家, 階級, あるいはそれ自体が形而上学的実体である社会 に求められていた. こんにち, 個人は, 自らの個人性を構築するためのより大きな資源を与えられている. 自律的に自分がしていることの意味を産出し認識することができるのだから, 私たちはほかならぬ個人として, 社会的行為に関わっているといえる. 個人的主体の形而上学的な見方から転じ, 私たちは個人を個人にするプロセス, 私たちひとりひとりが行為の自律的主体となることを可能になるプロセスへと注意を注がなければならない. こうして多重/多層/多面的な自己の個人性というものは, 個体化〔個性化〕(*individuation*) だということになる」(同書, 66ページ).
- 18) 同書, 61ページ.
- 19) 鈴木鉄忠, 前掲書, 2014a年.
- 20) A.メルツチ, 前掲書, 1996 = 2008年, 65ページ.
- 21) 同書, 69ページ.
- 22) 同上.
- 23) 同書, 70ページ.
- 24) 同書, 66ページ.
- 25) 同書, 67-68ページ.
- 26) 同上.

